

言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というぐらい難しい。

辞書編集部を舞台にし、新しい辞書の編纂に携わる人々を描いた小説『舟を編む』の作者三浦しをんさんに、辞書にまつわるお話から、三浦さんにとっての「読むこと」「書くこと」、教育への思いなどを聞かせていただきました。

作家◎
三浦しをんさん



三浦しをん(みうらしをん)

作家。1976年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。

2000年、長篇小説『格闘する者に〇』(草思社)でデビュー。小説に『光』(集英社)、『仏果を得ず』(双葉社)、エッセイに『ふむふむーおしえて、お仕事!ー』(新潮社)、『本屋さんで待ちあわせ』(大和書房)など著書多数。小説もエッセイもともに人気をほこる。

駅伝をテーマにした小説『風が強く吹いている』(新潮社)は漫画化、映画化、舞台化などされている。『まほろ駅前多田便利軒』(文藝春秋)で直木賞を受賞、のちに漫画化、映画化もされている。『舟を編む』(光文社)は2012年に本屋大賞を受賞し、映画化された(2013年4月公開)。

【辞書との出会い】

重くて、言葉がいつぱい入っているし、今まで使っていた辞書とは桁が違う。「大人になった!」と思いましたが。紙のめくり心地とかもすごい。

——三浦さんは辞書との最初の出会いのことを覚えていらっしやいますか？

三浦 それがあまり覚えていません。小学生の頃は、小学生用の国語の辞典を使っていたと思うんですが、その時はとくに引きたい言葉とかもなく……。辞書の引き方についても授業で習った記憶はあるんですけど、何を使っていたかは覚えてなくて。ですから、私にとって辞書との出会いというと、中学校に入った時にもらった三省堂さんの『大辞林』だったんですね。

——そうでしたか！ そうしますと、それはおそらく初版ですね。『大辞林』初版の刊行は一九八八年でした。

三浦 そうだと思えます。確か、親類の誰かがゴルフコンペで当たったとか、なんかそういう感じで、そこにちょうど中学にあがった私がいだったので、「あなたにあげましょう」みたいな。誰からいただいたかは忘れちゃったんですけど。

——それはご自分専用の『大辞林』だったわけですね。

三浦 そうなんです。それで、表紙の書名が金の箔押しになっているし、重くて、言葉がいつぱい入っているし、今まで使っていた辞書とは桁が違う。「大人になった!」と思いました。紙のめくり心地とかもすごい。実は私は紙フェチの気があるんです(笑)。図版もたくさん入っていたので、それでもう夢中になって、仏像の図版を拡大模写するという行為にいそしんでいたんです。

——模写されたんですか、あの線画のイラストを？

三浦 端からページをペラペラめくって行って、仏像の図版があると、そこを読んで、気に入ったものを何枚も何枚も、けっこうな枚数書き写していました。なんでそんなことしたかわからないんですけど、大興奮でしたね。——そうすると、三浦さんにとって最初の決定的な辞書との出会いは『大辞林』ということになりますか？

三浦 私にとってはそうでしたね。その後は、『広辞苑』も使って、両方使うようになりましたけれど、中学生になった時にいただいた『大辞林』はずっとずっと使って、もう、背表紙とかもベローンと取れちゃうぐらいになったんですが、今でも家に置いてあります。

二版三版と改訂のたびに買っているんですけど、ポロポロの初版が捨てられない。

——それは辞書をつくる側の人間として、とても嬉しいお話です。ありがとうございます。しかし、今のお話を伺うと、中学生時代の三浦さんの辞書体験としては、わからない言葉が出てきたから引くというよりは……。

三浦 眺めるのが楽しいんです。

——図版も含めて、読んでいらっしやるわけですね。

三浦 はい、ページをめくって眺めては、気になる項目を読むのがすごく好きでした。

——知らない言葉を見つけて、語彙を増やしていったというようなことはありましたか？

三浦 それが……覚えられないんですね、そういう言葉って。「不空羂索観音(ふくうけんじゃくかんのん)」という言葉は仏像の絵を写している時に覚えて、それ以来忘れられない仏像名ですけれど。実生活や勉強に役



「不空羂索観音」(『大辞林』三省堂より)

に立つような語彙が増えたかというところでもなかったですね、覚えられなかった。

——辞典の世界のなかで遊ぶという、そういう感じですね。

三浦 はいはい。読むのは好きでしたし、今でも大好きです。

「辞書を引き比べる」

言葉を四角四面にとらえて「必ず何か答えがあるはず、正しい意味があるはずだ」みたいに思う、そういう考え方から解放されて、いい意味で自分もいい加減になれて楽になる。

——実際、今、小説をお書きになるなかで、辞書は引かれるほうですか？

三浦 実は、書いている時はその場の勢いでバアッと書いちゃうことが多いんですけど、ゲラのチェックの時に、「あれ？ これではないのかな、あまりピッタリきていない気がするな。ちゃんと意味を調べよう」ということで引きますね。自動詞と他動詞がよくわからなくなることがあって、辞書を開いて用例を見て判断することも多いです。

——今、お仕事で使われている辞典はどういうものですか？

三浦 『大辞林』『広辞苑』『岩波国語辞典』『新明解国語辞典』と、あとは『日本国語大辞典』。その五種類を場合にに応じて使っています。たかが『大辞林』と『広辞苑』をセットでどっちも見るようにしていて、あとは、「この言葉だったら、このサイズの辞書に載っているかな？」みたいな感じでやっています。

——複数の辞書を引き比べる人は少ないので意外に知られていないのですが、言葉の解説の仕方（語釈）は辞書によってずいぶん違ってらるんですよね。

三浦 ほんとうに違いますよね。そこがまたおもしろいところだと思えます。私も学生時代は『大辞林』一種類しか使っていなかった



たので、あまり気づいていなかったのですが、違う辞書を併用するようになるとわかりますよね。並び方も違うし、辞書ごとに、性格という個性がそれぞれあっておもしろいなと。「言葉の意味の定義には唯一の正解があるわけではなく、各辞書がそれぞれに良いと思う説明とか解釈とかを載せているんだな」とわかってきて、ますます辞書って人間っぽいなと思うようになったんです。

——引き比べをやると、言葉を言葉で解説する方向の、その角度とか姿勢が辞書ごとに違うことがわかるんですね。その違いから、その言葉の意味の膨らみがよりしつかりわかるようになったりするので、辞書の引き比べ、読み比べというのはとてもおもしろいです。学習という語弊があるかもしれないけれど、少なくとも子どもから大人まで楽しめる、とても刺激的な遊びだといえますね。

三浦 ほんと、そうですね。自分好みの紙の色とか文字の書体とかも含めて、好みの辞書ってだんだんできてくると思うんですけど、それプラス、好みの辞書とは違う視点の辞書がもう一冊手元にあると楽しいというか……。

——小学校などで辞書引きの学習を实践されている先生がいらっしますけれど、クラスのみなが同じ辞書を持つよりは、違う会

社の辞典を持ち寄って、同じ言葉を引いてみると……。

三浦 「ぼくにはこういうふう書いてあった」みたいな、そういうことが言い合えて楽しい。

——どっちの辞書の語釈がいいとか、なんで解釈が違うんだろうとか、読み比べのなかから言葉の意味の膨らみを確かめることができますね。

三浦 そうですね。「辞書には間違ったことは載っていないはず」「その言葉の正しい意味は辞書が教えてくれる」というように私たちは信頼していて、また辞書は事実、その信頼にこたえる書物ではあるのだけれど、正解が一つしかないみたいに、ついつい勘違いしちゃう。私がそうだったんですけど、辞書に書いてあることは、きっとこれが絶対の答えなんだろうくらいに思ってしまう。だけど実はそんなことはないわけで、いろいろな辞書を比べてみることによって、こっちはこう言っているとか、そういうのを知ると、言葉を四角四面にとらえて「必ず何か答えがあるはず、正しい意味があるはずだ」みたいに思う、そういう考え方から解放されて、いい意味で自分もいい加減になれて楽になる。これは、言葉に限らず当てはまることだと思うので、大きく言えば、世界のとらえ方の問題な

のかもしれないね。

【辞書の世界に渦巻く業とロマン】

そこへ到達する道のりは遠く、しかも何ルートも無数にあるという感じが、この世の中に辞書がいつぱい存在するってことに表れている。

——逆に、答えは一つではないので、みんなが一生懸命知恵をしぼって、より正確でわかりやすい語釈をめざすのだけれども、どこまでがんばっても唯一の正解には到達しない。そこがやっぱりいいところなのでしょうね。

三浦 そう、そこがいいところなんですよ。それが辞書という書物を生み出した、人類のロマン的な部分というか。もし答えが一つだったらこんな何種類もの辞書は出ないですよ。一冊でいいですもの。

——複数の辞書が切磋琢磨しながら進んでいくわけですね。

三浦 答えがないからといって何をしていいのかという、そうじゃないですよ。善悪の基準だって揺らぐけれども、だからと言ってむやみやたらに人の命を奪っていいの



かというと明確にそうじゃないように、やっぱり真理みたいなものはあるだろうと。そこへ到達する道のりは遠く、しかも何ルートも無数にあるという感じが、この世の中に辞書がいつぱい存在するってことに表れている。絶対一個にまとまりきっていかないっていう、そこが人間のいいところだなという気がするんです。

——三浦さんは、書評集『本屋さんで待ち合わせ』のなかで人の「業（ごう）」というものに触れて、「私はたぶん、なにかひとつのことに取り憑かれた人間の話が好きなのだ」と書いていらつしゃいますが、『舟を編む』は、まさに一つのことに取り憑かれた人間が登場するお話ですね。

三浦 そうですね。あの小説では、辞書を作

る人の話を人間の生き方の理想像として書いたんです。業といっても、いい意味での業とそうじゃない業がありますよね。負のスパイラルにはまるような悪い意味での業も。でも、そんな業ですら、まったくないよりはある人のほうが、私には魅力的な人物に見えるんです。お近づきになりたいかどうかは別として

(笑)。小説を書く人間というのは誰しもそうだと思いますけど、そういう業にとらわれざるをえない人のほうに興味があるし、知りたい。もちろん何も無いのつべりした人なんていないんですけど。

—— 一種の業をかかえながら優れた仕事をしました、辞書編集の先人たちが何人か思い浮かびます。昔の話ですが、神保町の旅館に半年間泊まり込んで仕事をした上司が実際にいたのです。会社もよく許したと思うのですが。

三浦 それって、会社の経費なんですよ。

—— ええ、そうです。

三浦 辞書づくりに取り組むと、身の回りのことに手が回らないから、旅館のほうが便利ですよ。ご飯を作ってくれるし、洗濯や掃除もしてくれるんだらうから。それにしても半年というのはすごいですね。

—— 私も二五歳の時、一晩だけ、その上司と一緒に泊まり込みをさせられたことがあるんです。

三浦 その方は夜もずっとやっってるんですよ？ 何をしてるんですか？

—— ゲラを直してるんです。

三浦 瀧本さんがいない夜には、サボって寝ていたりしないんですか？

—— いや、それはちょっとだけ寝てますね。本当にまったく睡眠なしだと……。

三浦 死んじゃいますからね。

—— 当時の私はゲラを直すスキルはないですから、その人の横でひたすらカードの整理をしたんです、五十音順になっていくかどうかの点検を。今だったらパソコンでできる作業ですが、当時は人力でするしかないんですね。それは『言語学大辞典』という辞典だったのですが、世界の言語の名称のカード何千枚かを五十音順に並べ替えるんです。まあ、和室の旅館だからやりやすいといえはやりやすい、畳の上に広げて……。

三浦 一晩に何千枚も並べ替えられるものなんでしょうか？

—— 並べ替えました。

三浦 でも、カンテツですよ？ 大変すぎる！

—— 昔ほどそういう極端な逸話が、たぶん辞典ごとに、さまざまな形であったと思いますね。今はそういうことやると大問題になります(笑)。

【辞書を編むということ】

その製作過程には実に多くの人の考えや目が入っていて、いわば無言の対話の連続の果てにできあがっているということなんです。磨いて磨いて磨いて、お酒の大吟醸のように、本当に磨いて磨いて……という作業です。

三浦 辞書も『大辞林』ぐらい大きなものになっても、専門の人だけが読めればいいというわけではないですよ。どういう人が使ってもわかりやすいようにするっていうところは、エンターテインメントの精神に近いものがあるんじゃないかなって勝手に思ったりしています。

—— 辞書は実用書なんですよ、究極の。学術書ではない。高度な専門的知識を背景にもって作られているので専門性は高い。でも、きわめて大衆的な書籍です。専門性と大衆性って普通はまじわりようがないのだけれど、辞典というものは、その二つが実用性の一点でまじわっている希有な書籍ではないかなと考えています。

三浦 専門の先生が何人も、辞書づくりにたずさわって、それぞれが最先端の研究をな

さっていて、その成果を語釈にぶつけていると思うんですけど、その先生が書いた専門書を読んでも素人にはわからない。でも、研究の積み重ねが、多くの人にわかる形で辞書に反映されている。岩波新書でも、読んでいて「ごめん、わからない」っていうことがある。みんな向けのはずなのに、そういうものが中にはありますからね。辞書って最先端の研究をちゃんとみんなにわかりやすい形で、使える形で説明してくれているっていう、そこがすごい。

——辞書の編集者としての役割のなかでは「多くの人にわかっていただけのものになっているかを点検する」ということ、これがすごく大きいんです。一項目一項目の語釈には多くの執筆者がいるわけですけど、専門の学者の先生に書いていただく正確な元原稿をできるだけわかりやすくするというのが編集者の腕の見せ所といえますか……。

三浦 編集者の方が一番目の読者。小説の場合でもよく言われるけれど、辞書も同じで、編集者は辞書の最初の読者であり使用者だから、ここをこうしたほうがいいとか、著者の先生とは違う視点で指摘ができる。それによってより多くの人に届く形に練っていくという事ですすね。

——専門書の場合だと、できあがった原稿に



編集者が意見を言うことは、その内容が専門的であればあるほど少なくなるわけです。でも、辞書の場合は正反対。一番最初の、出発点の原稿から赤字（朱）が入るんです。編集者がそこで何をしているかというところ、ひとりで言うとうわかりやすくしているということなんです。

三浦 そういう内容点検は編集者の方だけでやるんですか？

——編集者、校正者、内容校閲をされる編集委員など、多くの人が、それぞれの役割に応じて内容点検をします。私が辞書づくりにかかわる人間として、辞書をお使いいただいた読者の方々が一番お伝えしたいのが、『新明解国語辞典』のように個性がはつきり出ている辞典でも、たった一人で編むということではなく、その製作過程には実に多くの人の考えや目が入っていて、いわば無言の対話の連続の果てにできあがっているということなんです。磨いて磨いて磨いて、お酒の大吟醸のように、本当に磨いて磨いて……という作業できればと。

三浦 そうして大勢の人が目を通して、晴れて出版されると、今度は辞書を使う人からの意見がどんどんきて、ますます研磨されるということですかね。

——はい。だから版を重ねている辞典は中身が練れていますね。どの辞書も完璧を期してつくるわけですけど、初版というのはやっぱり、内容があちこち暴れている、バランスがとれていないという面がでてきます。それが個性と言えば個性なのかもしれないけれど……。

三浦 『大辞林』をはじめ、版を重ねている辞書の編集者の方って、次の版ではここをこ

ういうふうにしよという準備をされますよね。使っている側からすると、「ええっ、そんなところ全部直すのは大変じゃないですか!」と思うようなことを考えていらっしやる。「でもそのほうが正確ですし、使い勝手もいいと思うので……」みたいな感じで、すごく真剣に考えていらっしやいますよね。

——『舟を編む』では、作中の辞典『大渡海』の刊行祝賀パーティーの席上で、「明日から早速、改訂作業をはじめろぞ」という編集者の言葉が出てきますが、本当にそうなんですよ。できあがった時ほど嬉しくて怖ろしい瞬間はありません。正直言うと、できたばかりの辞書を正視できない。誤植とか、まずい部分を見つけたらと思うと見られない。だけど翌日ぐらいになると、早くも付箋が貼られているんですよ。その話をする、そんなに間違いがあるんですか、ひどいじゃないですかと言われるんですけども、間違いがなくても、直したいところ必ず出てくる。

三浦 ここは、もうちょっと解釈を深められたかも、というようなことが見えてくるんですね？

——はい。すべての辞書はできあがったと同時に改訂のプロセスに入っていく。みんな本当にそう思っていて、ほぼ無意識に改訂を始めてしまう。

三浦 すごいことですな。私の場合は小説を本にしていただけでも、読み返すことは、ほほえないんです。担当の編集者の方から「できました!」と送っていたら、ついに形となったとうれしいんですけど、怖いからあまり開かない。

——星新一さんは、自身の作品の書き直しをずっとなさっていたそうですね。

三浦 そう、もう信じられない。文庫になる際に大幅に加筆修正する人もいるけれど、私は基本的にはしませんね。心臓が悪いですもの。

——三浦さんは文庫化される時に手を入れたりはなさらない？

三浦 極力、入れないようにしています。ウワツて思っても入れないです。単行本の時に



読んだ人に「文庫ではなんだか印象が違うな」と思わせては悪いということもありますし、自分の精神が耐えられないということもあります。

「書くよりも読んだ——中学校時代」

学校の図書館はすごい勢いで利用してましたし、学校帰りには必ず本屋さんに寄って、何時間か徘徊しないと家に帰れない、という生活でした。

——プロの作家になられた方には失礼な質問かもしれませんが、作文は好きでしたか？

三浦 嫌いでしたな。何を書いていいかわからなかったです。読書感想文とか。

——書く力、文章力はあるのに、ということですね。

三浦 いや、どうでしょう。あまり書きたくないし、書くべきことが浮かばなかった。

——それは与えられたテーマだったからですか？ ご自身はいつぱい書かれているわけですね、ハードボイルドとか。

三浦 それは、ただだんに、その時に読んだ

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』に感動してのことだったんです。それっきり何も書いていない。

——本はものすごくたくさん読まれていましたよね。感想文を書いてきなさいというような宿題ではなく、自分で書きたいから書いたというようなこともなかったのですか？

三浦 それもなかったです。読んだら読みっぱなし。何を読んだとかメモを付けたこともないので忘れていく。だから、たぶん教科書のことも覚えてないんでしょうね。ちなみに、日記のたぐいも続いたためしがないんです。日記帳を買って、「やってみるか」と思ってもたった一日だけ。

——小説家、物書きといわれるお仕事に就かれた方のなかには、小さい頃から文章を書くのが好きだったという方がたくさん……。

三浦 いらっしやいますよね。私は全然そういうのはできませんでした。読書感想文もどう書いていいのかがまったくわからなかった。そもそも、本を読んでそのあとに感想を書きなさいって言われても、そういうものってすぐに言語化しにくいですよ。プログラなどで、自分が読んだ本について、「私はこう思った」という記録を全世界に公開してる人がいっぱいいますよね。それは本当に不思議で、よくこんなすぐに書けるな、すごいなっ

て。読書感想文も他の作文も大の苦手でした。何を書いていいのかわからなかった。それよりは教科書や本を読んでいるほうが楽しかったですね。

——中学生の頃には、お小遣いをもらってよく本屋さんに行っていらしたんですよ。

三浦 はい。でもマンガばかり買ってたけど（笑）。

——呉智英さんの名言にもあるとおり、マンガは本ですから。

三浦 そうですよ、そうですね！ 子どもの頃から、マンガを読んでいるんですけど、マンガで漢字が自然と覚えられるということがありますよね。小説は学校の図書館で借りて読んでいました。中学生の頃は、丸山健二、坂口安吾、久生十蘭とかその辺りが好きでした。学校の図書館がけっこう充実していたんですよ。全集になっているものも読んだりしました。

——中学生の三浦しをんさんにとっては、図書館や書店は特別なお気に入りの場所だったのですね。

三浦 そうですね。学校の図書館はすごい勢いで利用していましたし、学校帰りには必ず本屋さんに寄って、何時間か徘徊しないと家に帰れない、という生活でした。

——そうになると、それは一種の中毒のような

……。

三浦 完全に中毒です。やめられないんですよ。それくらい本を読むのは好きでした。書くよりも読むほうが今でも好きです。

——教科書にどんな作品が載っていたらいいと思われませんか？

三浦 すごくメジャーで文豪という域に入っているような大作家の文章も入って欲しいけれど、文庫になるにはどうしたってマイナーすぎて難しいような海外の短編小説などもあるといいですね。たとえばイタリア人の書いた短編とか、南米文学などにも中学生が読んだっておもしろいと感じるものがけっこうあると思うんです。もちろん、SFもいいですね。星新一さんの作品にしても、教科書で読んでおもしろいなと思って次々に他の作品を読み始めましたし、筒井康隆さんも載っていたかな。超現代の最新SF短編とか、そういうエッジが効いたもの、最新の文学事情というものを反映させたものがあると思います。リアルタイムで生きている作家が何を世界に向けて書いているかというのを知ることがすごく重要な気がするんです。教科書ってやっぱりちよつと文豪寄りになりますよね。教科書はそういうものなのかもしれないけれど、両方あってもいいんじゃないでしょうか。まだ評価も定まっていないよう



「みんなが読むといこと」

言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というくらい難しい。

な実験的な作品などがあると、「小説って、なんかおもしろいかも」と思ってくれる中学生が必ずいるような気がするんです。長い作品でも抄出ができればいいんですけど、それが難しければ短編を選ばいい。でもやっぱり、できれば作品全部を読みたいですね。それと、著者の顔写真は絶対載せてほしい。みんな今も落書きしているはず（笑）。

——さきほど読書感想文のお話の時に「国語の授業って、読んですぐに感想を聞かれていたな」「そんなにすぐに言語化できるのかな？」というお話がありました。言語化できる、アウトプットできるようになるというのは、どれくらいの時間が必要なものなのでしょうか？

三浦 すぐには言語化できないと言いましたけど、そのままにして、言語化しないままボンヤリしていると、忘れてしまうという弊害もあるんですよ。文章化するというのは、読んだ時の自分の思いや考えを記憶として定着させるといふ意味もあって、しかも、無理矢理にでも言語化しようと試みることは、その時に何を思ったのかを考えるきっかけにもなるから、直後に感想を書かせるというのも悪くはないんだろうなという思いもあります。そうでもしないと記憶が流れ去ってしまふということはありませんから。

ただ、言語化のコツをつかむのには、それなりの時間と訓練が必要ですよ。中学生ぐらいで自分の気持ちとか考えたこと、感じたことを、はじめから明確に頭の中で言語化できる人は少数派なんじゃないかという気がします。少なくとも私が中学生の時は、モヤモヤを感じてはいたし、考えてはいたけど、明確に言語にして誰かに伝えることはできな

かったなと思います。大人になってもあまりうまくできないけれど。中学生といえはお年頃ですし、自分の感情や意見を友達に言うのは恥ずかしいという気持ちがあったと思う。ですから、それを恥ずかしがらずにできるように「おかしいとか間違いだとか言わずに、自由に書いたり話し合ったりしましょう」みたいな感じにうながしてくれる先生であれば、教科書の作品がいい刺激になって、みんなが盛り上がるようになるし、言葉で表してみよう、言葉にして人に伝えてみようという気持ちも育ってくるように思います。言葉をうまく伝えられるようになるのって、一生かかっても無理というくらい難しい。伝えたり、うまく感じとったりすることって、本当に難しい。でも、授業の中で作品を読んで、それぞれがどう思ったのか、無理強いはなくうまく言語化をうながすような場ができれば、それはとてもいいことですよ。そういう経験を子どもの頃にするのは大事なことだと思います。

——それが負の思い出にならないことが大事ですね。

三浦 そういうふうにもっていつちゃだめですよ。それは先生の問題だし、クラスの雰囲気も関係してくるでしょうね。そういう先生は少数派だと思いますが、どの世界にもや

る気のない人はいいわけではない。みんなの興味とか好奇心とかをかきたてるのがへたな先生もいるでしょう。その場合、授業で感想を言ったり書いたりするのは、生徒にとっては苦痛ですよ。生徒がこうだと思っただけは言っただけ、「はあ？ 何言ってるの」「みたいに聞く耳をもたないような先生だと、生徒は自分の考えや感情なんて絶対に言おうとしなくなりません。こればかりは、残念ながらみんながいい先生にあたるとは限らないし、難しいですよ。

【読むということ、教えるということ】

よかれと思っただけですが、その子にとって苦痛であることだってあると思います。子どもによって受け取り方が全然違いますから。だからこそ教育が重要。

——「国語を嫌いな子をどうしたらいいんでしょうか？」と聞かれたら、どうお答えになりますか？

三浦 私はそれは簡単なことだと思っ

て、国語が嫌いとか本が嫌いとか、本が読めない、つまらないという人は、読まなくていいですよ、本なんて。他に興味のあることがあると思うんですよ。ゲームでもスポーツでも他に好きなことや得意なことが、一つぐらいは誰しもある。それをやればいいのであって、みんなが無理して本を読む必要は全然ない。「本なんてつまらない」とハナから決めつけず、いつか性に合う本と出会った時のためにも、最低限困らない程度の漢字の読み書きぐらいはできるようにしておく。それでいいんじゃないでしょうか。たとえば私は、数学を好きになれって言われても無理です。プライベートな時間にまで計算問題を十五分やりましようと言われたら、ヒートつてなる。無理に数学を好きにならなくて、買い物に困らない程度の計算能力があればいいでしょう？ 興味さえ捨てずにいけば、数学の問題を解くことはできなくても、本やテレビ番組を通して数学の世界や数学者について知ることができます。

——「計算能力は生きる上で必要な技術となります、だから勉強しておきましょう」という薦め方と同様に、「読書は生きる上で必要です、それは私たちの心を豊かにしてくれるからです」というような薦め方をされることがありますが、それはちよつと……。

三浦 違うんじゃないかと思えますね。本は一人で読めますから、自分の世界に入っていくってしてしまうことでもあるんです。むしろ視野が狭まってしまふ危険性だってあるわけです。「たくさん本を読んだら心が豊かになる、人格が磨かれる」というのは、「子どもを持つたら人間が大きくなりますよ」というのと同じ幻想です。もし、子どもがいる人が人間的に成長して心が豊かになるのであれば、いまごろこの世界はもつと良くなっているはずですよ。でもそうはなっていない。子どもを生み育てようと本を読もうと、それは人格とか心の豊かさとは単純に比例しないということです。自分の世界を広げていくのは大切なことですが、そのすべは本以外にもたくさんあります。たとえば、草野球とかサッカーで交流するとか、映画を見るとか。会社がそういう場であることもあるだろうし、インターネットの世界を通じてそれを獲得している人もいるだろうし。読書を特別に考えて無理に本を薦めるのは、良くないんじゃないでしょうか。そもそも、これをすれば心が豊かになるとか、これをしなかつたら人間が墮落するということはないし、よかれと思っただけですが、その子にとって苦痛であることだってあると思います。子どもによって受け取り方が全然違いますから。だから

「こそ教育は難しいし、だからこそ教育が重要。先生や教室内での友達とのかわりこそ、人にとってすごく大事なことだと思うんです。子どもを型にはめようとする先生が一番よくない。それはどんなに熱心な先生でもよくない。なるべく多くの生徒の好奇心をちよつと刺激してあげることのできる先生、授業のなかで「そんな話があるのか!」というような刺激をちよつとした雑談とかで提供してくれるような、そういうセンスのある先生の授業は、あとあとまで記憶に残るし、楽しい授業になると思います。私の経験した国語の授業でいうと、一見、自由に発言できるような授業でも、「この話の読み方はこうです」と断定される先生もいらっしゃいますけど、そうじゃない先生のほうが楽しかったし、教科書以外の話を読んでみようと思うきっかけになったような気がします。」

——これは社会人にも当てはまることだと思いますが、自分で何かしてみようと自発的に始めることが大切なのであつて、無理にする、させるという手法では、その人の学びにとって効果が望めないということですね。

三浦 はい。知らないよりは知ってるほうがいいし、やらないよりはやってみたほうがいいとは思っています。でも、やりたくない子に無理して薦めてもしょうがない。読まないよ

り読んだほうが新たな世界を知ることでもできるんだらうけど、読むのが苦痛で苦痛で仕方がないという人に無理に薦めてもどうなのかなっていう気がしているんです。ただ、その人がなにかを必要だと感じた時に、「そういえば」と助けになるような知識や情報をさりげなく与えておいてあげる。事態を解決する方法を自分で見つけられるような、好奇心や思考力を育ててあげる。それこそが人間に

とって大切な教育ではないでしょうか。中学生の頃は全然だったけれど、大人になって本好きになったという人はけっこういますよね。あせる必要はないと思います。

■了



*インタビューの全編を弊社辞書ウェブサイトにて公開しています。

http://dictionary.sansedo-publ.co.jp/topic/interview_mitara/